



18

関東大地震で地表に現われた旧相模川橋脚

国鉄茅ヶ崎駅から平塚行きバスに乗り、町屋停留所で下車して相模川の方向に約400mあるくと小出川にさしかかります。この川の下町屋橋の東側わきに、国指定史跡の「旧相模川橋脚」があります。

この旧相模川橋脚は、大正12年9月1日の関東大地震と続いておきた13年1月15日の地震のさいに、水田の中からニョキニョキと地表にあらわれました。かたわらの案内版には、次のように書かれています。

史跡 旧相模川橋脚

大正十五年十月二十日文部省指定

小出川に沿うこの一帯は、永らく水田であったが大正十二年（1923）九月および十三年一月の大地震によって、七本の橋脚が地上に出て来た。その後、地下に埋もれたもの三本が発見された。

相模川は、鎌倉時代にはこの辺を流れていたが、川すじの変化によって西方へ移ったもので、橋脚は土中に埋まったまま七百年をへて再び地上に露出したものである。

橋の幅はすくなくとも七米（四間）くらいと推定され、全国でも数すくない大橋であったと考えられている。

昭和四十六年三月十五日

神奈川県教育委員会

写真1 現在の旧相模川橋脚



関東地震の直後に、地形学的調査を行った山崎直方は、この旧橋脚の出現について次のようにのべています（原文の片仮名は、ひら仮名に直しました）。

「海岸地方の隆起に伴はれたる興味ある現象として相模野平野の南部に目撃されたものがある。即ち茅ヶ崎駅の西方約1軒許の所に於て、東海道の街道の通ずる下町屋橋の南方50米許の所にて小出川の西岸にある田畝の中に九月一日の大震と共に俄然7本の円柱が垂直に地中より現はれ、それが又翌年一月十五日の強震に於て更に高く押し上げられ、今は基の高さが地表上1.05米乃至0.8米即ち平均約1米に及んでおり、尚ほ此外に稲田の表面に現はれずして残っておるものが2本ある。其の円柱の太さは直径0.67米乃至0.58米即ち周囲約2米ある可なりの大柱であつて其の排列の状を見るに2本づつ一対をなして等距離に並び別に少し離れて上流の方に2本ある。此等は其の形状及び排列の位置より察して明かに橋脚たることを知ることが出来る。そしてそれが今後の小出川の如き小流に架せられたるものでなく更に長大なる河流のものであつたことも察せられる。今は此辺に其の様な河流もないが沼田頼輔氏は考證して此橋は建久九年（大正14年より728年前）建設されたものであつて当時の相模川本流に架せられたものであり、東海道の街道も今日の位置よりは少しく南方を過ぎていたものと説明している。意ふに其後相模川の河道が變じて西方に移り旧河道は田畝となり旧橋脚の上部は朽ちて唯地中に埋もつていた部分のみ保存されていたのが其脚底の固定していた地盤の隆起に伴い上部の砂礫土壌の層を貫て斯く突き出てたるものと想はれる。各柱の上端には地下礫層の礫を載たままに露はれたるも亦興味あることである。」（山崎直方（大正14年，1925）関東地震の地形学的考察，震災予防調査会報告，第100号（乙），11-54，震災予防調査会）（平野富雄）

写真2 関東大地震直後の旧相模川橋脚（震災予防調査報告，第100号（乙）による）

